哲學研究　第四十一號

感覺の强度に關する疑義

楢崎淺太郎

一

ヴントを始め多くの實驗心理學者は感覺に性質と强度の二つの根本的限定性を認めて、純粹の心的狀態に量的差別を許して居る。併し眞に感覺が質と量との兩面から見られ得るであらうか。若し感覺がこの兩面から見られ得るとせば、心理學的にはそは如何なる心的特徵に基いて居るのであるか。若し又兩面から見られ得ないとするならば、從來認めて來た强度とは、如何なる性質のものであつたか、かゝる强度は、心理學の研究上に如何なる效果のあるものであらうか。或はこは心理學から全然排除すべきものであらうか、或は其の意義を變更して、心理學の內に保存して置く方が便利であらうか。此等三、四、の問題に關する從來の學者の見解を經として、少しく自分の考察したことを述べて、識者の御批正を受けたい。

抑も心理學が心的現象の質的研究の外に、量的問題を有するに至つたのは、ヘルバ

ルト以後のことである。ヘルバルト以前の心理學は、未だ形次上學から獨立して居なかつた爲め、心理學は純粹に質的觀察にのみ限られなくてはならぬものと一般に信ぜられて居た。然るにヘルバルトは之に猛烈に反對し、心的內容は intensive Grösse であり得ると主張し、觀念の强度 (Stärke einer Vorstellung) なる純形次上學的概念を說明心理學の根本假定とした。フェヒネルはヘルバルトより得たるこの觀念の强度上學念を心理學の領域から驅逐し、精神物理學の內容を成す所の心身の關係の形次の概的問題の研究に利用し、ヘルバルトの觀念の强度を、感覺の强度(Stärke der Empfindung)に置き換へ、且つ其の强度をは、該感覺を生起せしめたる刺戟の强度の測定によつて、測定せんとしたことは、誰しも熟知の事柄である。而してウェーベルの法則がフェヒネルの法則に發達し得るためには、感覺の一般の測定可能を前提とし、この前提は又感覺は一般に量として取扱ひ得るものなることを豫定して居る。フェヒネルのこの感覺の强度なる概念は、フェヒネル以後今日までの多くの實驗心理學者の好んで用ひる所となつて居る。然らば感覺は如何なる見地に於て、如何なる特徵に基き、如何にして量と考へ得るのであらうか。

ヴントはこの量的概念を、感覺、感情、時間觀念、空間觀念、情緒、意志過程にまで適用し

て居る。そして其の理由とする所は、ヴントによれば、精神現象は量的に變化し得る構造を有する性質的狀態(qualitative Zustände von quantitativ veränderlicher Beschaffenheit.)なるが故である(一五二五頁)。けれども量的に變化し得る質的狀態とは如何なることであらうか。ヴントは Qualität と Quantität とは、經驗に於ては分離することの出來ないものであつて、これは單なる抽象に基く論理的分離(logische Sonderung)である。夫故にこの兩概念は Modi des Seins なりとして居る(一五二五頁)。換言せば、この概念はヴントによれば、心的要素の二大限定性(Bestimmungsstücke)である。この性質なる限定性によつて、種々の精神要素を互に區別することができる。しかしてヴントは、この精神の一定の質的狀態は、又常に一定の强度を有し、同質の精神要素は强度の種々なる程度を有し、最弱の場合から弱、强、中强を經て最强にまで變化することができると考へて居る(二三六頁)。

ヴントが精神的要素の差異の限定性を Qualität としたことについては、何人も異論はない、本來精神的要素とは、差異的見地から心理學的分析を何處までも進めて行つて、遂に其の最後に得たる結果であつて、各精神的要素が獨立の地位を保ち得るは、要素自身が他の要素と異る實在であるからである。卽差異を本質として自ら自

己を現實的に維持して居る。夫故に精神的要素に差異の限定性の存するとは、精神的要素本來の面目である。ヴントは精神的要素のこの性質が、一定不變であり得ることを豫定し(三一七九頁)、この一定不變の性質が更に他の限定性によりて變化することを認め、この第二の限定性を強度(Intensität)と名けて居る。夫故に強度とは變化しないと思考せられた過程に、性質とは異る種類の差違を生ぜしむる限定性である、(Intensitätsgrade eines qualitativ unveränderlich gedachten Vorgangs)(三一七九頁)。即ちヴントは同一性質中に、差異を認め、之を強度と名けて居る。そしてこの強度の差異は、同一性質内に於て段階狀(gradweise)に起るものとし、之をヴントは reine Intensitätsunterschiede と名け、之を空間的に一延長(ein geradliniges Kontinuum)にて示して居る(二三七頁)。

二

ヴントは光度感覺の系統は他の感覺の系統と異つて、質の變化と強度の變化とは離すべからざる關係にあり、兩變化は互に相並行し、絕對的に一延長なりと考へ、此の系列の最下級は質から見ると黑であつて、強度から見ると微弱であり、其の最高級は質から見ると白であつて、強度から見ると強大であると云つて居る(二六八頁)。この光

度感覺に於て、白と黑とを質の相違と見る點に於ては勿論何人も異論はあるまい。けれども其の黑が强度から見ると微弱であり、白は强大であると云ふことは、如何なることであらうか。

强度から見ると黑は微弱であつて、白は强大であると、心理學的に云はるゝがためには、かゝる知覺或はかゝる判斷の基礎たる何等かの心的體驗がなくてはならない。その心的體驗は何であらうか。余の知る限りでは、ヴントは之につきては、明かな記述を與へて居ない樣である。又他の多くの實驗心理學者も、之につきては明かなる說明をして居ない、殆んど自明の眞理なるが如くに取扱つて居る。そして、頻にこの概念を使用して居る。然らばこの概念は、記述を與へ、說明を加ふることすら要せざる程の明白なる事實に基いて居るものであらうか。余にとつては、心理學的にはこは實に理會し能はざる概念である。この理會し能はざるは、余の內的經驗に缺陷あり、或は又觀察の不精密の爲めであるかも知れない。故に余はこの問題の解決のために、簡單なる實驗的內觀を試みて見た。

（イ）光覺の變化の內觀

器械、光覺の變化を生ぜしむべき物的刺戟の調節器として、私は光度辨別器（Bri-

tness (discrimination apparatus) を利用した。この器械を用ゆると、光度の極少なる變化を生ぜしむることができ、かつ其の光度の客觀的變化の度の比較的の價も、測定することができる。

實驗法。觀察者は暗室に於て、光度辨別器の前にて椅子に凭り、左右の眼をして正しく光度辨別器の半透明の二個の窓に相對立せしめる。而して眼とこの窓との關係を一定ならしむるために、觀察者の頭を固定して置く。實驗者は辨別器の上面にある左右の軸を、軸の周圍にある度盛の同一の價の所に置き、それより一方の軸を少しづゝ廻轉せしめて客觀的の光度を變化させる。觀察者は始終注意を緊張して、二つの窓に現はるゝ光度を觀察し、如何なる變化が起るかを內觀する。

今實驗者が左右の軸を度盛の同一の所に置く時は、吾人の感ずる光度感覺は左右同一である。それより實驗者が上の右軸をある度だけ動かすと、初めて右の眼の感覺が變つて來て少しく暗くなる。今最初の感覺をAとし、現に感じ居る感覺をBとせば、普通人はBの感覺はAより弱いと云つて居る。この弱い感覺とは、如何なることであらうか。今AとBとの感覺を區別するのは、之は感覺の性質によるのである。然るにこの質的に異るAとBが、又强度から見て强弱の差ありとせば、そは如何なる

體驗に基いて云ふのであらうか。　AがBより強く、BがAより弱いと云ふことが、若し其の文字通りに云はるゝならば、このAとBとの間に、何者か共通的のものがなくてはならぬ。　そして一方を他に比較し得るためには、何等かの單位がなくてはならない。　けれども已にミュンスルベルヒの云ふ如くに(四頁)今この實驗に於て、強いといふAの光覺は、其の強度の弱いと云はるゝBの光覺の集合ではない。　強い感覺は、心理學的には弱い感覺の結合から出來ては居ない、寧ろある意味に於て、兩者は互に比較することのできぬ etwas ganz Neues として意識に現はれるのである。　唯かゝる感覺の物理的刺戟たる光源に於て、之を客觀的に見るならば、強き感覺の光源は弱い感覺の光源のある倍數に當つて居る、　而しこの倍數的關係は感覺にあるのではなくて、客觀的刺戟相互の間にあるのである。　故に純心理學的に見るならば、Aなる強い光覺とBなる弱き感覺とは、二つの全く異る單一なる意識內容である。　吾人はこの兩者につき、兩者は相互に違つて居て、決して同一の物でないと云ふより外に言ひ樣がない。　若しこの質的相違の外に、更に量的相違を許すならば、この量的相違は感覺其者の特徵から導き來つたものではなくて、物理學的知識から、或は又他の意識內容の特徵から二次的に輸入し來つたものであらう。　夫故かののエックスネルは、光

覺の強度の概念は、感覺から導き出した思想ではないと論じて居る。

私は光覺辨別器の前に座し、二種の最小差異光覺を幾度か比較し內觀して見た。さうして內觀を精密にすればする程、兩者の差は益々明かになり、前には同一と思つた感覺も又差異が現れて來り、客觀的には$\frac{\Delta R}{R}$の價は漸次減少して來る。そうして異る感覺の間に何等共通の要素が認められない。差異的分析的態度で感覺に對すれば、感覺は益々差異的特色を發揮し、共通の要素は益々認め得なくなる。共通の要素が無ければ、量の概念從つて強度の概念或は限定性は起り樣がない。前に述べた如く、ヴントの純粹強度の差異とは、同一の質といふ一種の共通の要素に現はるゝ第二の差異的區別である。然るに光覺の最小變化も、已に一種の質的差異である。感覺相互間に於てこの質的差異の外に、更に強度的差異の內的經驗は、余の光覺の變化の實驗的內觀に於ては、到底認め得なかつた所である。而し此の場合に於ても、余の內觀の粗漏と缺陷に其の起因があるならば、余はこの問題につきて議論するの資格のないものである。若し又余の內觀の正常なることを許さるゝならば、上の如き立言を爲さざるを得ないのである。余は余の內觀の正常なるや否やを正さんがために、他の學者の內觀の結果を檢べて見る。

（ロ）ベルグソンの光度の變化の內觀

余の知る限りでは、感覺の强度につきて初めて精密なる內觀を試みたのは、ベルグソンの樣に思ふ。ベルグソンは一枚の紙が四個の蠟燭に照されて居るのを順次に一つづゝ消し、その際生ずる感覺の變化の內觀を試みて居る。さうして氏が內觀の事實を記述して、次の如くに述べて居る。

人はかゝる際の感覺の變化を光覺の强度が減じたと思ふけれど、これは光源に關する過去の經體から判斷したのである。若し人が過去の記憶と言語の習慣とから全然離れて、直接に眞に知覺する所を突き止めるならば、そは光度の減じたと云ふよりも寧ろ蠟燭の消された瞬間に、白の表面に暗い影（une couche d'ombre）がさしたといふ方が適當である。この影は吾人の意識に對しては、光と同樣に une réalité であつて、光度の變化と云はんよりも、寧ろ新なる名稱を與ふべきである。吾人は過去の經驗と、物理學の學說の影響を受けて、黑を光の感覺の皆無となり、或は少くも最小限になつたものと考へて居る。併し原因を結果に移して考へたり、直接の印象を過去の經驗や科學に置き換へたりしなければ、白の光度の變化は Nuances differentes ではなくして、寧ろ diverses couleurs du spectre に比すべきものである。外界の原因は連續的に變

化するけれども、感覺の變化は非連續的(c'est que la changement n'est pas continu dans la sensation comme dans sa cause extérieure.)である。感覺は新しき性質の發生するまでは變化しない。感覺の變化するのは、新しき性質の發生したためである。光の變化は性質的變化(des changements qualitatifs)であつて、量的變化ではない。若し之を量的變化と見て、一は他よりも四分一だけ弱いと云ふならば、そは感覺其者を直接に比較したのではなくて、感覺を喚起した光源の比較から得て來たのである。そしてこれは心理學的ではない(六三九—四〇頁)。

三

余はベルグソンのこの深き內觀に共鳴するものである。今私が、光度辨別器の前に座して、客觀的光度の變化に對應する意識內容を、純粹に內觀すると、光度の客觀的價値がある度の變化を爲すと、今迄の感覺が急に變化して新しい感覺が現れる。而して其の現れ方は、ベルグソンの云ふ如く急激なる飛躍(Sauts brusques)であり manière discontinue である(六四三頁)。そしてこの新しき感覺と、其の直ぐ前の感覺とをどんなに比較して見ても、共通の要素を認めることができない。殊に兩感覺の性質に深き注

意を向ければ向けるほど、其の差異の方面が益々著しくなつて、一層かけ離れたものとなり各が更に深く自己の獨立性を主張する樣な心持で意識に現れて來る。西田博士が精神要素に於ては、精神內容がそれ自身によりて互に相分つと(十三六七二頁)と述べられて居るが、この意味は今余が玆に述べた樣な心持を指示せられたのではあるまいか。然るに之と反對に、注意の度を漸次に弱め、其性質の特質を見過す如き態度卽ち總合的態度を執ると、兩感覺は接近して來る。けれども決して同一とはならない。矢張質的差異を嚴然として保つて居る。若し同一となつた時は、已に性質的に同一となつた時である。性質的に同一であつて、量的に異ると云ふことは、物理界にはあり得るかも知らないが、意識內容にはあり得ない樣に思はれる。玆に二種の感覺A及びBがあつて、其兩方から性質的なる相違a及びbを除去した場合に、其後に吾人の感じ得る同質的なる如何なるものが殘るであらうか。余は幾度も〳〵この光覺の變化を內觀し、かゝる場合いかなるものが殘るかと考へて見た。けれどもこの場合感じ得る何者も、發見することができない。吾人の感じ得る所のすべてのものは、唯性質の差のみである(Cette difference qualitative étant tout ce que nous sentons)(六四八頁)と、ベルグソンは云つて居るが、余は內觀的に全然之に同感である。ボアスも感覺の

強度の相違は、質的相違の特種の形式に外ならないと(八五六六頁)推論して居る。

三

して見れば心的狀態に心理學的分析を施して其の極限に達すると感覺の質的狀態に達する。二個以上の感覺に若し差異があるならば、其の差異の本質は性質的のものであつて、量的又は強度的のものはあり得ないと云はなければならぬ。吾等が從來の心理學的獨斷及び偏執を放拋し、感覺を純粹に內觀すると、すべての感覺はすべての感覺に對し相互に異質である。之に強度的限定性を加ふるの餘地は毫末も無い。然るに之に強度の限定性のある樣に思はるゝのは、感覺を生じたる客觀的刺戟の強度を、感覺內に混入するか、或は感覺を客觀的刺戟に移して考へたものである。ヴントが黑の感覺は強度が弱く、灰は中強で白の感覺は其の強度が最も強いと云ふのは、內觀的事實に基いて云つたのではなく、黑、灰、白を喚起した客觀的刺戟の強度につきて云つたと解すれば、其の意味が明かとなる。けれども若し內觀的に云ふならば、ある意味に於て黑は灰よりも強度が強いと云はなければならぬ。夫故にベルグソンの云ふ如く、從來用ひられた實驗心理學者の所謂感覺の強度は、感覺の純粹な強

度ではなくして、刺戟の強度てふ客觀的內容を混入したものである。

日常の生活に於ける吾人の習慣的認識態度は、ウォードの云ふ如く(十二一八頁)、物理學的(the physical)であつて心理學的ではない。吾人はの常習は、あらゆるものを物理學的に、或は實體的に理會せんと試みる。從つて精神的方面の觀察に於ても、外界世界の特徵の類推によつて理會せんと試み、內的現象其の者の特徵に深く留意しない。これが感覺の強度に、外的刺戟の強度の混入し來つた根本條件であつた。さうして強度の概念は前に述べた如く、形而上學的假定の下に、ヘルバルトによつて、心理學に初めて輸入せられたのであるが、感覺の強度に外的刺戟の強度を混入せしめたものは、精神物理學者、生理學者、並に過去の未だ純化せられざる實驗心理學者であつた。ウォードは一に生理學的心理學者(十二一八頁)に、而してベルグソンは精神物理學者にこの罪を歸して居る(六五一—五五頁)。

吾人の習慣的認識態度卽ち常識的見地は、日常生活の必要から構成せられて居る。ベルグソンの云ふが如く、日常生活に於ては、外物は主觀狀態よりも我々に重要であるから、外物及び其の屬性を過重して、主觀狀態を客觀化し、外的原因の概念を內的狀態に混入するは、自然の進み方である。さうしてこの自然の進み方に先鞭をつけた

ものが、純粹心理學者にあらずして、廣義の物理的なる形容詞を有する心理學者であつたことも、當然である。何となれば此等の學者は常識的見地に一歩を進めた the habitual physical standpoint の人であつたからである。さうして今日に於ても、尙ほこの見地は、心理學的問題の解決に對して、非常なる障害を與へつゝある。感覺の强度の概念が、今尙ほ多くの心理學書に、虛威を振つて居るのも、この見地の肯定せられて居るがためである。而してこの見地は、常に常識を其母として互に握手して居るから、心理學者さへ容易にこの見地から逃るゝことができない。けれども純粹心理學の建設並に其の發達を希ふ吾等は、外面的正確を裝つて、物理的方向に進まんとするこの物理的見地を退け、先づ自らこの物理學的見地を征服しなければならぬ。余はかゝる見地から、外的刺戟の强度より類推的に混入し來つた感覺の强度なる概念を、心理學から全然排除したいのである。さうして實在に對應しない單なる空名を放拋して、思惟の混亂を防禦したい。

四

然らば感覺其者には强度なる限定性があり得ないとするならば、感覺相互の關係

或は又感覺と他の意識內容との關係に於て、强度なる限定性を認むることはできないであらうか。

例へば光覺辨別器の光の比較的光度の尺度に對して、茲にA。b、c、d e、f、g、h、iなる光の感覺があり、其の質が內觀的に皆異つて居るとする。そうしてAとb、bとc、cとd、dとe、eとf……と直接に相接近せる此等の感覺は、相互に實驗心理學者の云ふ所謂 eben merklich でありとする。而してこの eben merklich とは、ヴントの云ふ Merklichkeitsgraden der Empfindungen (一六一八頁) のある度であり、この Merklichkeitsgraden とは、感覺變化 (Empfindungsänderung) の Merklichkeitsgraden である。そうするとAとb、bとcが、eben merklich といふ意味は、Aとbとの差異がbとcとの差異に同一であつて、且つ其差異の度が極小であると考へることもできる。卽ちこの意味は、A、b、cは性質的に異つた感覺ではあるが、其差異の程度が同一であると云ふことになる。この場合に感覺の差異の程度の同一であると云ふことは、感覺を起した刺戟の强度の差異が同一であると云ふ意でないことは云ふまでもない。しかしてかゝる場合に、ウェーベのル法則によれば、$\frac{\Delta R}{R}$ はある範圍で同一であるが、而し感覺の變化が eben merklich であると云ふことと、$\frac{R\Delta}{R}$ が同一であることは、半行現象ではあるが、同一現象ではな。い

前者は刺戟の強度の關係であり、後者は感覺相互の關係である。而して余の問題は $\frac{RA}{R}$ の問題ではなくして、感覺相互の問題である。

フェヒネルはAなる感覺からなるb感覺への移行を一の實在と見做し、之を極小差異感覺（ΔE）と名け、且つ之を量と考へて居るけれども、眞に實在として存在するものは、AとbとのAとbとの狀態のみである。ベルグソンの云ふ如く、Aとbとが數であるならば、b−Aの差は明に實在である。けれどもA及びbは異質的なる單一狀態であつて數ではない。又Aとbとを論理的に思考するならば、Aとbとの關係は論理的實在であるかも知らぬか、之は心理學的實在ではない。感覺其者から見ると心理學的には、唯二つの單一狀態の繼起の事實あるのみである。之を二つの量の差と見るのは、感覺を起した二つの刺戟の量の差から見た皮想の非心理學的解釋である。ベルグソンは、フェヒネルの誤謬は、繼起せる感覺SとS′との un intervalle の存在を信じて居た點にありと論じて居る（六五〇頁）。即ち二つの感覺間の極小差異を強度の單位と見做し、其の第一の感覺の強度をEとすれば、第二の感覺の強度は E+ΔE、第三感覺は E+ΔE+ΔE となり、かくしてすべての感覺は、其の下位の感覺の和で示すことが出來、從つてこゝに感覺の強度が段階的となり、數量的に思考し得らるゝこととなるのであ

る、けれどもΔEの存在も、ΔEの價の相等しきことも、又各感覺の强度がこのΔEの總和によつて示し得らるゝことも、內觀的心理學的には、體驗し或は證明し得ざる所で、こは一つの任意なる假定に過ぎない。この點に於てフェヒネルの感覺の强度は、ヘルバルトの觀念の强度と何等異る所のない形而上學的獨斷であらう。

ヴントはAからbへの感覺の變化は、bからcへの變化に等しいと考へて居る。乍併この感覺の變化とは如何なることであらうか。今壓衡に於て百瓦に對應するAなる感覺がありとする。さうして余に於は之に四瓦の重量を加へると初めてbなる感覺が生ずる、このbの感覺のある際に、更に四瓦强の重量を加へると、初めてdなる感覺が生ずる。此の場合の$\frac{\Delta R}{R}=\frac{1}{25}$である。ヴントはかくの如きAよりb、bよりcへの感覺の變化が等しい、其の變化が eben merklich であるといふのであるが、この感覺の變化とは何であらうか。Aからbbからcに感覺が變化した時に、實際に內觀し得る所の者、換言せばこの際の心理學的實在は、Aの感覺と時間的に繼起して新しきbの感覺が現れ、bの次ぎにcが現れたに過ぎない。Aが變化してbとなり、bが變化してcとなつたと云體驗は少しもない、Aの次ぎにb、cなる新なる感覺の生起の繼起である。これが眞の實在である。Aがbに變化し、bがcに變化

したといふのは、A、b、cの感覺を外から見た、或は論理的思惟によつて、bはAより變化し、cはbより變化したと推定したもので、こは心理的實在ではなく、論理的思考の產物である。かくの如くに考ふるのは、分離的なる實在に系統を與へんとする便宜上の外的整理である。こは、精神物理學者が、刺戟の强度の順位に、感覺の系列を作らんとするのと、便宜上の外的整理なる點に於て何等選ぶ所がない。故にヴントのこの見解につきては、已にクリースなども反對して居る(七一二頁)。

五

若しAとb、bとcがeben merklichであつて、兩者の關係に於て何等かの心理學的實在を有するものとせば、余の內觀によればそは注意の活動である。何となれば、最小差異感覺の知覺に於ける唯一の基礎は、刺戟の變化が內觀者にある新なる意識體驗(ein neues Bewusstseinserlebnis)を喚起することである。而してこの新なる意識內容は、注意の集注の缺げたる時には、決して現出しない。刺戟の變化の大なる時は、之によつて受動的注意が起り得るけれども、刺戟の最小變化に對應する最小差異感覺の知覺に於ては、注意の極度の緊張を要し、之なくば、到底最小差異感覺の知覺は成立する

ことができない。實に注意活動は感覺の識別感覺變化の知覺、或は新なる意識體驗の現出に對しては、缺く可らざるものである。夫故にコブレスキーも、覺閾變化の極めて重要なる要素の一として、注意の活動を擧げて居る(十五)(二五九頁)。

R+ΔR に應ずる新なる感覺の生起するためには、この新なる感覺の想像的印象に向つて注意の極度の緊張を要する。この注意の極度の緊張を除くならば、ウェーベルの法則たる $\frac{\Delta R}{R}$ = Constant なる經驗的法則も直に破壞せられてしまう。此點から見るとウェーベルの法則を、ヴントが統覺の法則と解釋する點に大なる興味がある。夫故に極度の注意を拂つて初めて新なる感覺を體驗し(壓衡による余の先の內觀の場合)或は二個の異る感覺の質的極小差異を、注意の最緊張時に於て認識した時(ストラットンの壓覺の研究(十三)に我等は之を eben merklich といつて居るのである。これが eben merklich の內觀的、心理學的內容である。今は、b 或は A と b との感覺の差異の認識について云つたのであるが、b と c との感覺從つて c と d、d と e の感覺につきても同樣である。して見れば、若し A と b、b と c との差が等しいと云はるならば、極度の注意を拂つた識別と云ふ點に於て等しいのである。內觀的には b−A の差 x と c−b の差 y とが同一であるのでは勿論無い。そはベルグソンの云ふ如く心的內

容相互間には包含者(Container)と被包者(Contained)との關係は許されない。

かくの如く考へると、識別の際に伴ふ注意の緊張の度の同一と云ふ點に於て、兩者の關係が同一であると云ひ得る。かく考へればA、b、c、d、e、f、g、h、iの間に、ある同一なるものの實在を認めることができる。けれども、眞に其注意の緊張の度が同一であると云ふことを、心理學的或は內觀的に云はうと思ふならば、兩者の注意の緊張の度の感じ其の度が其の極であつた事實のみでは不充分である。兩者の注意の緊張の度の感じ其の者の比較によらねばならぬ。若し之に基かずして、先に述べた個々の場合に於ける、同一の注意の緊張と云ふ事實から、出發し、之に推定を加へると、Aとeとの辨別に要する注意緊張の度はAとbの辯別に要する注意の程度の四分の一でよいと云ひ得るのである。けれども心的內容に四分の一と云ふ量ば、到底適用することは出來ない。心的內容はミュンステルベルヒの云ふ如く、算へ上げることは出來るが、之に、之れ以上進んだ計算を施して、新しきものを作り出してはならない。若し之を行ふならば、こは論理的には正當であつても、心理學的には誤謬である。

內觀的卽ち心理學的には、Aとeとの識別に要する注意の度は、Aとbとの識別に要する注意の度よりも異る。そして、Aとbとの識別に要する注意の度がxの方向

に向つて居るとせば、Aとbとの識別に要する注意の度はxの反對の方向yに向つて居ると云ひ得る。これは內觀的實在を言語で飜譯したのである。このxの方向を強いと云はゞ、yの方向は弱いと假に名け得る。そしてAとeの識別に要する注意の度は、Aとbとの識別の注意の度よりも弱いと云ひ得る。そして茲に注意の度が強い或は弱いと云ふのは、內觀的には注意活動の度の小なるを指示した語である。この注意活動の度は、外界の刺戟の强度の如きものではなくて、吾人の內にある深き意識的活動の差である。從つてこの意識的活動の差は、客觀的に測定し得る刺戟の數又は大さでは到底決定することが出來ない。寧ろこの內にある深き意識的活動の知覺の差によつて、認めらるゝ所のものである。外界に於ける同一の刺戟も、意識內容となつて現はるゝ時には、注意の緊張の度に應じて、著しく變化せられ心理學的には、感覺又は觀念の質の相違となつて現はれる。

然るに又他方では、この意識的活動の度が同一である場合には、外界刺戟の數又は大さによつて、意識內容が異つて來る。たとへば振動數が同一で、その振幅に大小ある時は、大なる振幅を有するものは小なる振幅を有するものより、普通の語で强き感覺と云はれて居る樣な感覺が生ずる。かゝる事實があるから、人は意識內容其者の

差を客觀的刺戟の差又は大腦分子の運動の量的差異にて說明せんとし、玆に唯物的心理學、從つて機械學的心理學說が生ずる。けれどもこの學說の獨斷的なることは、深く論ずることを要せない程明かである。何となれば主觀的に注意の緊張の度を同一にして置くも、外的刺戟の强度に應じて、無意的注意の興進せらるゝことがある。そして吾人はこの無意的注意の興進の度を知覺する。夫故に我等は感覺の强度をかゝる方面から研究しやうと企ててはならない。而しベルグソンも云ふ樣に(六六頁)外的刺戟が感覺の評價の際、何等かの關係はあるかも知れない。

けれども感覺の識別の際に働く注意の活動其者の如きものは、外的刺戟とは全然獨立な內面の深き活動で Seel-Sufficient なものである。ベルグソンは外的要素の含まれない單一なる意識狀態、例へば深い喜び、悲み、反射的感情、審美的感情等を擧げ、これが純粹の强度 (L' intensité pure) であると云つて居る(六六頁)が、これ等の意識狀態に共通なる內面の深き活動は、余の內觀によれば、余の先に述べた注意の緊張の際の活動と同一のものである樣に思はれる。又ヴントが psychische Grösse として、感覺の强度の外に統覺の明晰度 (der Klarheitsgrad oder die Schärfe der Auffassung psychischer Inhalte) (一五三九—五四三頁)を認めて居るが、余はこの明晰度を生じたる心的活動を眞の純粹强度

と思ふものである。この場合に於て初めて、同質なるものの中に差異が現れ、ヴントの云ふ reine Intensitätsunterschiede が直覺せられるのである。この純粹强度の差異は、意識の深奥又は意識の中心に於てのみ直觀せらるゝ現象である。この純粹强度なる限定性は、意志活動に屬するものであつて、感覺又は感情に屬するものではないと余は考へる。然るにヴントは强度なる限定性は感覺、感情に屬するものと考へ、ベルグソンは感覺からこの限定性を奪つて、深き感情活動に許して居るのであるが、余は感覺より强度を排除する點に於ては、ベルグソンに贊同し、感情に純粹强度を許容する點に於てベルグソンに尙滿足を感じ得ざるものである。余はこの點に於てヴント及びベルグソンに反對し、純粹なる强度の限定性を意志活動中に直觀せんと欲するものである。

常識に於ては、人は强度なる限定性を感覺及び感情に許容し、痛みが弱い、愉快の度が强い、欲望が高まつたなどと云つて居るが、而し痛みの感覺、愉快、欲望の現はるゝ時には必ず其の豫件又は根柢として意志活動がある。そしてこの痛み、愉快、欲望の程度を評價する時には、必ず之をこの根柢たる意志活動、中心的自我に關係せしめ、或は意志活動に於て評價して居るのである。我等は天才の名畫を見て、深き心の喜びを

感ずる。この深き心の喜びは、純なる內容なき活動である。この純なる活動それに深き喜びが宿つて居る。かの名畫を見た時の、心の奧底に感ぜらるゝ深き單一な活動を離れて、他に深き喜びは余には存在しない。そしてこの活動は感覺でも感情でもなく、純粹意志に近いものである。ヴントは意志、感情、觀念を空間的に表現して、意志は本丸で、其の周圍の第一保壘が感情で、更に其の外廓を構成して居るものが外部的體驗則ち觀念である(九四五—四六頁)と云つて居るが、この深き心の喜びなる單一活動は、意識の本丸で起つた現象である。而して之は深き內觀に訴へて實證するより以外に、客觀的の證明法の許され得ないものである。然るに吾人は普通この純粹なる活動に基きて意識內容の評價を爲しながらも、純粹なる活動其者に氣がつかないから、之を其の周圍にある保壘や、外廓に歸してしまうのである。かくして又內觀的にも感覺や、感情が强度を有することとなつたのであらう。多くの內觀的心理學者が、感覺に强度を認めて居るのは、かゝる認識過程に依つて居るのではあるまいか。而してベルグソンが感情に純粹强度ありと云ふのも、かゝる考へ方ではあるまいか。氏はこの點を委はしく記述して居らない。兎も角純粹の活動は、內容が無いから特色が少ない。從つて又之に注意し難く、多くの觀察者から閑過せられ易い。ビルス

ブリーは感覺に強度を認めては居るが、其の特質を明に定義しては居ない。けれど興味あることには、感覺の強度は眞の內容を持たない、而して正確に記憶し難い(Intensities have no real designations, and cannot be remembered at all accurately.)(十二〇九頁)と述べて居る。氏のこの斷定に指示して居る所のものは、表面的には、感覺の強度と云つて居るけれど、眞に捉へて居るところは、余の云ふ內容なき活動其者と解することができる。

かくの如く考へて、余は意識內容に若し強度の概念が許さるゝならば、注意の活動の純なる所に於てのみ認め得べきではあるまいかと考へて居る。對象を離れた純粹注意の活動を、具體的經驗から思惟の上で抽象して考へて見ると、これは內容なき純なる活動である。この純なる活動其者に於ては、質的差別は認めることができない。質的に云ふたらば同一質の不斷の連續である。然るにこの同質的連續には、變化がある。各瞬間に於て其の活動のある差異を體驗する。この變化、この差異こそは、心的強度なる概念に最も適當なる內容である。余は意識の強度の本質を、この境に認めたい。而して他の一切の強度は不純なる強度として純粹心理學からは排除したい。

余はかく考へて、ウォードの最近の著作を見ると、the intencity of a presentation の決定要素として、外的刺戟の外に注意の集注の度を加へ、むしろ後者を一層重要視して居る(十二八—一一九頁)のを見て愉快に感じた。氏は注意の集注の度を、觀念の强度の重要な要素と考へては居るけれども、矢張强度を觀念に屬する限定性と考へて居るのは、從來の多くの學者の見解と同一であつて、余の見解とは全然異つて居る。けれども、注意を、强度の有力なる要素となしたる點に於て、余と接近して居る。

リップスは意識の强度とは、意識內容が、Auffassungstätigkeit に對する Zumutung の程度であると考へて居る。この强度は unmittelbare Grössenbewusstsein であつて、吾人によつて直接に體驗せらるゝものであると(十四二三四頁)云つて居るが、こは余の云ふ內容なき活動の純粹强度を、感覺又は觀念の方向、從つてより客觀的方向から內觀したものと解するならば、余の見解はリップスの說と調和し得る樣に思ふ。何となれば意識內容の把捉活動に對する Zumutung は、必ず把捉活動其者に於て起り、其結果把捉活動が變化する。其の把捉活動の變化を意識內容に投出して見ると、それがその內容の强度と思はれるのである。そして把捉活動とは一種の意志活動である。夫故に意志活動無くしては、到底强度なる體驗は成立することができない。

西田博士は昨年六月の哲學研究に於て「感覺」につきての深き考察を發表せられ。我等を一層深き方向に啓發指導して下さつたが、其中に、博士は「意識の强度とは、das Allgemeineの力を現はすものである。意識現象に於ては性質卽ち强度である、性質とは經驗內容が單に其物として靜的に考へられたもので、强度とはその動的狀態である。……感覺の强度とは意識內容の力である。……感覺の强度といふのは、種々なる性質的一般者の一點たる自我に對するZumutungである、性質的統一が更に深且つ大なる自我の統一の一部分となつた時、感覺は强度を有するのである(三六八七—六九二頁)と述べられて、感覺の强度を純粹主觀の方面からは、之を力と見做され、客觀的方面からは、リップスと等しく意識內容の一般者に對するZumutungと考へられて居る。そうして何れの方面から見るも、意識の深奧の活動に關與して、初めて强度なる特徵の生ずるものなることを、我等に敎示せられて居る。

シュンステルペルヒは、感覺の强度に關する興味ある一新說を有して居るけれども、氏の見解は未だ强度の眞實を捉ふる能はず、其の伴隨現象を高潮して之を眞實在と誤解して居る樣に思はれる、氏の見解も、ベルグソン等と等しく、感覺はheterogene Bewusstseinsinhalteであつて、互に比較することのできないものである(四五六頁)。けれども

この感覺か現はるゝと同時に、反射的にMuskelspannungenが現れ、之に對應して、Spannungsempfindungが生ずる。この緊張感覺は其の性質が同一であつて、强度が變化し得る。故に吾人はこの感覺に基いて、感覺の比較か可能となり、從つて之を含有する他の異質的感覺の間接の比較測定が可能となると論じて居る(四五六頁)。されども、筋肉緊張の感覺は氏のいふ如く、果して質的に同一であらうか。若し又この緊張感覺の性質は眞に同一でありとするも、これが感覺の强度の本質であらうか。余は此の點に疑を抱いて居る。

ミュンステルベルヒの云ふこの筋肉の緊張は、注意の活動に伴ふ必然現象である。さうして氏も又注意の活動の緊張妨害を受くる時は、感覺變化の識別、又は其の變化の方向の識別の障害せらるゝことを認めて、その原因を緊張感覺の强度の不足に歸して居る(四五〇—五一頁)。卽ち氏も注意の作用を、强度の知覺に深き關係あるものと認めて居る。この點に於て余の强度の考察と同一方向にある。けれど氏はこの注意の活動に伴ふ筋肉の緊張感覺を高潮する點に於て、余と趣きを異にして居る。卽ち氏は注意の末稍的方面を、而して余は其の中心的方面を重要視する。

六

余は純內觀的分析的立脚地より、心理學に於ける强度の限定性を感覺及び感情の屬性より奪ひ去り、之を注意の活動、從つて意志活動に屬する限定性とした。眞に心理學的なる强度は、內容なき活動其者の內にのみ初めて認め得る實在と思ふのである。然らざれば、同一質に於ては到底差異が成立し得ない。今この純內觀的分析的立脚地を去り、意識內容の總合的見解に轉じ、この異質的なる意識內容、從つて何等の結合、系統、組織を有せざる支離滅裂たる意識內容に、聯絡を與へ、秩序を定め、組織を作り、統一を求めんと欲せば、何等かの手段を必要とする。かゝる場合に於ては、感覺を生起せしめたる刺戟の强度に基きて、感覺を一定の系列に定位せしめ、分離せる感覺に統一を與へることもできる。さうして刺戟の强度に應じて配列せられたる感覺を、感覺の强度の差に基く系列と假りに呼ぶことも出來る。かゝる意味に於て感覺の强度なる概念を保存することも、意識內容統一の一手段としては、必要なことであるかも知れない。而しこの際に於ける感覺の强度とは、感覺其者の內觀的性質を現はしたものではなく、全く外面的便宜上の概念と豫めよく理會して置かねばならぬ。

然らざれば、前に述べた眞の意識の強度と混同を來すの憂ひがある。

或は又前に述べたるA、b、c、d、e、f、g、h、iの如き最小差異感覺の相互間に含まる其の數を手段として、A＜b＜c＜d＜e＜f＜g＜h＜iの如くに、感覺に系列を與へることもできる。而してかくの如き系列を假りに便宜上から、感覺の強度なる概念にて現はすこともできる。フェヒネルの假定を捨てゝ、フェヒネルと同一の感覺の強度なる概念を作らんとせば、この方法が最も容易である。故にこの半ば內觀的半ば客觀的意味に於て、感覺の強度なる概念を保存することもできる。

或は又假りに各感覺に對應せる注意の緊張の程度に於て、意識內容を系列化することも出來る。こは全く內觀的整理法なれども、意識內容其者の本質に基いた統一でないから、この點に於て矢張一種の便宜上のものである。けれどもかくして統一したるものを、意識の強度による配列と云ふ名稱を使つても構はない。

かくの如き意識內容統一の便宜上の意義から、強度の概念を使用することは、研究者の自由である。けれどもそれでは眞の心理學的意義のものと混同を來すの憂ひがある。過去の精神物理學者、並に生理學者は、この混同を純粹心理學に導き入れ、そして學界に無用の混亂を起した。故に余は強度なる概念は意志活動にのみ特有な

る限定性とし、統一概念としての便宜上の强度は、別種の名稱を用ひた方がより理知的ではないかと考へる。（大正八年六月二十九日）。

參考書

（一）Wundt, W : Grundzüge der Physiologischen Psychologie. Erster Band. Sechste Auf. 1908.

（二）Wundt, W : Grundriss der Psychologie.

（三）Wundt, W : Logik. Zwei Bände. Bd. 2. 1895.

（四）Münsterberg, H. Neue Grundlegung der Psychophysik. Beiträge zur Exp. Psychologie. Heft 3. 1890.

（五）Stumpt, C. Tonpsychologie. Bd. 1. 1885.

（六）Bergson, H : Essai sur les données imm'ediates de la conscience. 1888.

（七）Wundt, W : Über das Weber'sche Gesetz. Philosophische Studien. Bd. 28. 1885.

（八）Boas, F : Ueber die Grundaufgabe der Psychophysik. Pflügers Archiv f. d. ges. Physiologie. Bd. 28. 1882.

（九）Wundt, W. Einführung in die Psychologie. 1911.

（十）Pillsbury, W. B. The Fundamentals of Psychology. 1916.

（十一）Ward, J. Psychological Principles. 1918.

（十二）文學博士 西田幾多郎 講述 哲學研究第二十七號大正七年六月

（十三）Stratton, G. M. Über die Wahrnehmung von Druckändervugen bei verschieden Geschwindigkeiten. Philo. Studién Bd. XII.

（十四）Lipps, T. Psychologische Studien. 1905.

（十五）Kobylecki,S. Ueber die Wahrnehmbarkeit plötzlicher Druckänderungen. Psych. Studien Bd. 1. 1906.